

平成30年6月20日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H05166

研究課題名(和文) 中央アジア、シルクロード拠点都市と地域社会の発展過程に関する考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological Research on the cities along the Silk Road in Central Asia and those development

研究代表者

山内 和也 (Yamauchi, Kazuya)

帝京大学・文化財研究所・教授

研究者番号：70370997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、シルクロードの交易拠点都市の成立と展開の実態を明らかにすることである。そのために、中央アジアのキルギス共和国北部に位置するアク・ベシム(スイヤブ)遺跡において発掘調査を実施し、考古学的な研究を行った。発掘調査によって都市のプランや構造を明らかにするとともに、周辺地域の調査によって、都市の成立と繁栄に不可欠な水利システムの存在を解明することができた。こうした成果によって、シルクロード沿いの拠点となる交易都市の成立と展開、そして同都市が位置する地域の発展過程について考察することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the actual situation of the establishment and development of the trade center city of Silk Road. For that purpose, archaeological excavation was conducted at Ak-Beshim (Suyab) site located in the northern part of the Republic of Kyrgyzstan in Central Asia. Excavation survey revealed the plan and structure of the city itself, and survey of the surrounding areas enabled us to clarify the existence of the irrigation system indispensable for the establishment and prosperity of that city. With these results, we were able to consider the establishment and development of trade cities along the Silk Road, and the development process of the area where the cities are located.

研究分野：考古学

キーワード：シルクロード 都市遺跡アク・ベシム スイヤブ チュー川 ソグド 唐代碎葉鎮城 交易都市 キルギス

1. 研究開始当初の背景

(1)ユーラシア大陸の東西をつなぐシルクロードは、東洋と西洋の文化的、社会的、政治的統合や交流を促す「道」として古代から現代まで脈々と生き続けている。このシルクロードは、地域的に固有な文化を有する集団が、異文化との統合や交流を通じて独自に発展させた都市や集落あるいは地域的集合体をつなぐ自然発生的な「点」、そして「面」のつながりである。つまり、シルクロードを形成した「点＝都市・集落」、そして「面＝地域社会」の発展過程を長期的な視点から明らかにすることこそ、シルクロードが有する歴史的意義の本質的な解明につながる。それゆえ、シルクロードの本質を理解するためには、1つの点＝都市、そして1つの面＝都市を取り巻く地域社会を選び、そこを拠点にその都市と地域を研究する必要がある。

(2)また、その地域がどのように発展してきたのか、あるいは変遷してきたのか、その地域の中で都市はどのような役割を果たしてきたのか、さらには都市に住む人々＝都市民、農耕民、そして遊牧民がどのような関係にあったのか、あるいはどのように共存してきたのかを歴史的な時間軸に沿って考える必要がある。

(3)以上の観点を基に、キルギス共和国の北部のチュー川流域に位置する都市遺跡アク・ベシム（スイヤブ）遺跡とその遺跡の周辺地域を対象として本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究では、キルギス、チュー川中流域に位置するアク・ベシム都城址を主たる調査対象とし、遺跡レベル、地域レベルでのシルクロード都市の形成過程を明らかにすることを目的とする。

具体的には、その形成過程の長期変動（青銅器時代～イスラーム時代）の解明に資する考古学研究を中心に据え、個別の歴史研究を展開する2つの分担・連携研究（ソグド時代、唐代の歴史研究、イスラーム時代の歴史研究）の成果を統括することによって、古代シルクロード都市の形成過程を包括的に明らかにする。

3. 研究の方法

(1)先方学術機関（キルギス共和国科学アカデミー）と協力して、アク・ベシム遺跡において発掘調査を実施し、都市構造及びその変遷を明らかにするとともに、層位的な物質文化の資料を入手し、研究することによって時代的な変遷を明らかにする。

(2)発掘という直接的な手法だけでは、限られた時間の中で都市構造の全体を明らかとすることは困難であることから、地中探査の技術を導入し、より広い範囲での都市プランを明らかにする。

(3)アク・ベシム遺跡の周辺の遺跡を踏査することによって、都市と遊牧民の共存関係を明らかにする。

(4)アク・ベシム遺跡が位置する地域の水

利システムを調査することによって、アク・ベシムという都市が成立し、発展することが可能であった理由を明らかにする。

(5)文献史学の観点からは、キルギス地域も含め、当時用いられていたソグド語資料を用いて当時の状況を研究するとともに、漢文史料を用いて東側から見たアク・ベシムの遺跡とその歴史を解明する。

(6)出土した遺物については、型式学的な研究のみならず、自然科学的な手法によって、その技術や材質の研究を行う。

(7)科研費による研究体制の枠組みを超えて、地形学の専門家とも連携し、地形学から見た中世チュー川流域における都市遺跡の立地特性を明らかにする。

4. 研究成果

(1)発掘調査に関しては、アク・ベシム遺跡を構成する2つの街、つまり第1シャフリスタン地区と第2シャフリスタン地区で発掘を実施した。



アク・ベシム遺跡調査地点

①第1シャフリスタン地区では、街を南北に貫く街路とその両側に位置する建物群の発掘を行った。その結果、街路の両側には、金属精錬の工房や炉やパン焼き竈を伴う住居の存在が確認された。街路については、人々の通行の「路」として利用されるだけでなく、雨水等の排水及び日常生活ゴミの廃棄の場としても機能していることが明らかとなった。



第1シャフリスタン地区

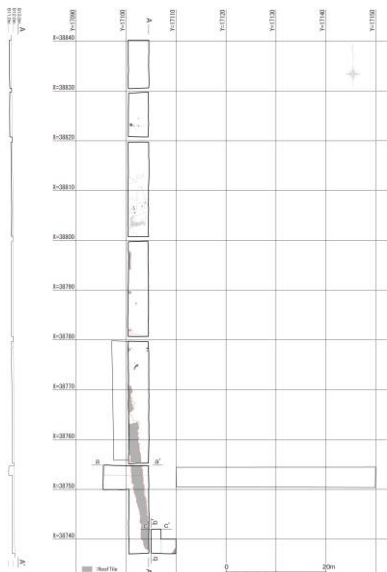


第1 シャフリスタン地区平面図

②第2 シャフリスタン地区は、かつてラバト（郊外区）とされていた地区である。カラキタイ区とも呼ばれており、11～12世紀の街と考えられていたが、発掘調査の結果、この街が中国史書に記載された「碎葉鎮城」であることが明らかとなった。碎葉鎮は、唐代に置かれた安西四鎮の中でも最も西に建設された軍事基地であり、唐の西方進出の拠点であった。これまでもアク・ベシム遺跡がスイヤブ、そして碎葉鎮であったと推測されてきたが、発掘調査によってそれを確定することができたのは大きな成果である。



第2 シャフリスタン地区

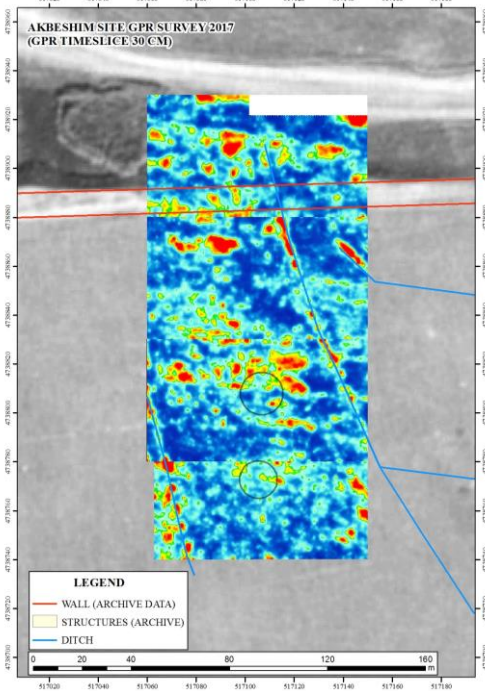


第2 シャフリスタン地区平面図

(2) 地中探査では、第1 シャフリスタン地区、第2 シャフリスタン地区の双方で調査を行った。

①第1 シャフリスタン地区においては、街路が調査区の南側に続いていることが確認され、都市構造の一端を明らかにすることができた。

②第2 シャフリスタン地区においては、多くの反応が確認されている。それが何であるのかについては、今後の発掘調査の成果と照らし合わせながら、明らかとしていくこととなる。



第2 シャフリスタン地区平面図

(3) 遺跡が位置する地域の踏査を実施した結果、かつての遊牧民と都市民・農耕民の土地の使い分けを理解する糸口が得られた。遊牧民は南側に位置する山脈の麓から中腹までを生活圏とし、都市民・農耕民はその下方、チュー川の南岸を生活圏としていたことが明らかとなってきた。それゆえ、遊牧民と都市民・農耕民は、この地域を共有するとともに、共存することができたものと推測される。今後は、その実態の解明を目指す。

(4) アク・ベシム遺跡が都市として成立し、発展するためには、恒常的な水の供給システムが存在することが不可欠である。この観点から遺跡周辺の水路の調査を行った結果、遺跡の南側に位置する「ウスマン・カナル」と呼ばれる水路が、都市の成立に大きな役割を果たしたことが明らかとなってきた。チュー川のやや上流、川が盆地に流れ込む地点を取水点とし、等高線に沿うように遺跡の南側、斜面の上方に水が導かれている。この水路によって導かれた水が遺跡の南側に広がる農地を灌漑するとともに、都市に恒常的に水を供給していたことが明らかとなった。

(5) 文献史学の観点からの成果は、以下の2点である。

①ソグド語文字資料を収集し、その解読を行った。特に出土資料に記された、いわゆるソグド語の墨書の解読を進め、現在、報告を取り纏め中である。

②漢文史料に現われる素葉=スイヤブ(主に玄奘の『大唐西域記』と『大慈恩寺三蔵法師傳』)や安西四鎮の1つである碎葉鎮に関する文献史学的研究を行った。

(6) 出土資料については、これまでに実施されてきた資料とも比較しながら、型式学的な研究を進めている。層位的な調査によって資料が得られたことで、この地域における土器編年に寄与することが可能となってきた。また、出土した金属製品に関しては、キルギスの若手研究者とともに保存修復処理を行い、あわせて材質調査等を行った。現在、報告を取り纏め中である。

(7) 地形学の見地からは、中世チュー川流域における都市遺跡の立地特性を明らかにすることができた。季節的な洪水等の自然災害を避けながら、チュー川の水を利用できる地点が都市の立地として選ばれたことが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 山内和也、榎原功一、望月秀和、2017年度阿克・ベシム遺跡発掘調査報告、帝京大学文化財研究所研究報告、査読なし、Vol. 17、2018、pp. 121-168
- ② 佐藤剛、山内和也、望月秀和、八木浩司、中央アジア・チュー川盆地の地形分類図を基に検討した中世都市遺跡の立地特性、地理、査読有、印刷中、2018
- ③ 城倉正祥、山藤正敏、ナワビ矢麻、山内和也、バキット・アマンバエヴァ、キルギス共和国阿克・ベシム遺跡の発掘(2015年秋期)調査出土遺物の研究—土器・埴・杜懷宝碑編—、WASEDA RILAS JOURNAL、査読有、Vol. 5、2017、pp. 145-175
- ④ 城倉正祥、山藤正敏、ナワビ矢麻、山内和也、バキット・アマンバエヴァ、キルギス共和国阿克・ベシム遺跡の発掘(2015年秋期)調査、WASEDA RILAS JOURNAL、査読有、Vol. 4、2016、pp. 43-71

[学会発表] (計12件)

- ① 山内和也、榎原功一、望月秀和、中央アジア、シルクロード拠点都市の成立とその展開—キルギス共和国、阿克・ベシム(スイヤブ)遺跡の調査(2017年度)—、第25回西アジア発掘調査報告会、2018
- ② 山内和也、榎原功一、望月秀和、中央アジアシルクロード拠点都市の成立とその変遷、第24回西アジア発掘調査報告会、

2017

- ③ Yamauchi Kazuya, New Approach for the Investigation of Ak-Beshim -Suyab-, Irrigation System, Geomorphology, Geophysics, キルギス・日本シンポジウム「中世チュー地域の都市遺跡: 保存、活用、研究」、2017
- ④ 山内和也、阿克・ベシム遺跡とスイヤブ、2016年度中央アジア遺跡調査報告会、2017
- ⑤ 山藤正敏、阿克・ベシム遺跡ラバト地区の考古学調査(2015年秋季)、2016年度中央アジア遺跡調査報告会、2017
- ⑥ 山内和也、バキット・アマンバエヴァ、帝京大学シルクロード学術調査団による2017年度阿克・ベシム遺跡調査、2017年度シルクロード学研究会、2017
- ⑦ 榎原功一、阿克・ベシム遺跡第2シャフリスタンの瓦、2017年度シルクロード学研究会、2017
- ⑧ 吉田豊、キルギス共和国を中心としたソグド語文字資料、2017年度シルクロード学研究会、2017
- ⑨ 山藤正敏、シルクロード天山北路における東西文化接触—キルギス共和国阿克・ベシム遺跡発掘調査の成果から—、ユーラシア考古学勉強会第6回例会、2017
- ⑩ 山藤正敏、阿克・ベシム遺跡ラバト地区出土土器の年代学的検討、2017年度シルクロード学研究会、2017
- ⑪ 城倉正祥、山藤正敏、ナワビ矢麻、山内和也、バキット・アマンバエヴァ、唐代西域、碎葉鎮を探る、日本考古学協会第82回総会、2016
- ⑫ Yamafuji, M., Jokura, M., Yamauchi, K. and Amanbaeva, B., In Pursuit of the Tang Outpost Suyab, An Archaeological Expedition at Ak-Beshim Site, 2015 Autumn Season, 4th International Conference, Archi-Cultural Interaction through the Silk Road, 2016

[図書] (計2件)

- ① 山内和也、バキット・アマンバエヴァ編、キルギス共和国国立科学アカデミー文化遺産研究所・独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究—阿克・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡—2011~2014年度—、2016、108
- ② 久米正吾他、新泉社、イスラームと文化財、2015、297

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:
発明者:

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<https://www.teikyo-u.ac.jp/affiliate/research/sr.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山内 和也 (YAMAUCHI, Kazuya)
帝京大学・文化財研究所・教授
研究者番号：70370997

(2) 研究分担者

中村 俊夫 (NAKAMURA Toshio)
名古屋大学・学内共同利用施設等・教授
研究者番号：10135387

吉田 豊 (YOSHIDA Yutaka)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：30191620

城倉 正祥 (JOKURA Masayoshi)
早稲田大学・文学学術院・准教授
研究者番号：90463447

久米 正吾 (KUME Shogo)
東京藝術大学・社会連携センター・講師
研究者番号：30550777

山藤 正敏 (YAMAFUJI Masatoshi)
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財
研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：20617469

榎原 功一 (KUSHIHARA Koichi)
帝京大学・文化財研究所・講師
研究者番号：50642526

増渕 麻里耶 (MASUBUCHI Mariya)
独立行政法人国立文化財機構東京文化財
研究所・文化遺産国際協力センター・アソ
シエートフェロー

研究者番号：50569209

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

(4) 研究協力者
()